

☐「御嶽山噴火 一生還者の証言 増補版」(小川さゆり 著)



著者紹介 1971 年生まれ 中央アルプス、南アルプスが映えるまち、長野県駒ヶ根市生まれ。南信州山岳ガイド協会所属の信州登山案内人、日本山岳ガイド協会認定ガイド。スノーボードのトレーニングのため山に登り始める。景色もよく達成感もあり、すぐに山を好きになる。バックカントリースキーに憧れ始めた 25 歳のとき、友人が雪崩で命を落とす。山は楽しいだけではない、命と向き合うリスクを痛感する。「山で悲しい思いをしてほしくない」、そんな思いをもって、中央アルプスをメインにガイドしている。山以外では無類の猫好き。＜ヤマケイ文庫カバーより＞

ご承知の通り御嶽山は 2014 年 9 月 27 日 11 時 25 分頃噴火した。その日は晴天、土曜日、昼頃、しかも紅葉時期の絶好の登山日和。多くの登山者で頂上へ賑わっていた。一瞬にして笑い声が消え悲鳴に変わった。著者は山頂付近にいた生存者の一人。その体験を元に生々しい状況を語り始める。噴火時 山頂周辺には 250 人ほどいたという。しかし、そのうち 63 名は帰らぬ人になってしまった。著者を含め生存者との生死を分けた差はどこにあるのか。著者がこの本を通して最も言及したい点である。全編を通じて繰り返して述べているのが、暗黙のルールは「山で死なない。無事下山して家に帰る」ということである。そのためには何をしなければならぬのか。噴火の教訓はなにか。運が良かったとか運が悪かったということではなく、生還した理由がそこにはあるのではないかと著者は自分の行動を振り返り述べている。

- ・噴煙を見た瞬間から、危険だと判断でき、命を守る行動をした。

多くの登山者は噴火からの対処法を知らず、どうしていいかわからず噴煙を見上げたまま、とっさに行動ができなかったのではないかと著者は述べている。

- ・最初の噴石を無傷で凌ぎ、頭を守れる岩陰に移動できた。

けがをしていたら、隠れ直すことができなかった。自分より一回り大きいだけの岩陰で噴石を凌ぐことは現実的でない。命は助かってもしけがは免れなかった。

- ・浮石だらけの急斜面も走って下れた。

身についた登山技術も役立った。地形を見て、登山道を上がるより、登山道から外れるが下の方が早いと思ったこと、灰が積もった斜面を、スピードをもって上り、下ることができた。新雪と同じ感覚だった。

- ・地形と山小屋がどこにあるのか、頭に入っていた。

噴火前一ノ池がカラカラに乾いているのを見ていたのが重要であった。見ていなかったら避難ルートには使っていない。その場所の状態を見ていたのは、常に状況を観察する癖が役だった。

- ・技術ではないが、装備も安心材料となった。

長期戦を覚悟できたのは、数日分の食料と水、温かい紅茶、ツエルト、アンダーダウン、ヘッドランプ、ファーストエイドセットなどを持っていたからだ。日帰りであっても、このぐらいの装備は持つべきである。

- ・そして噴煙を見た瞬間から、生きて還ることを強烈に意識し続けた。

「ダメかな」と思った瞬間もあったが、やはり生きることへの執着が勝っていた。

この御嶽山の惨事を風化させないために著者は、全国への講演や執筆を通じて精力的に活動している。そして「忘れたてはいけないのは、御嶽山が活火山であるということです。それ故に、またいつか噴火するかもしれません。登山者が御嶽山に登ったとき、火山が作り上げる圧倒的な景観を楽しむと同時に過去の噴火から学び、山とは時として命と向き合う場所であることを感じ、考え、備えてもらえたら幸いです」と語っている。(IK)

御嶽山噴火 2024 年 9 月 15 日発行 ヤマケイ文庫 山と溪谷社 1430 円